

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別後承認雑誌第六二七号  
平成二十五年一月一日発行(第四百十六卷第一号)

# ホトトギス

一月号



## 俳句随想 〔三百六十七〕

汀子

今年の年尾忌は快晴であった。鎌倉の寿福寺に遙々お越し下さった方々は年尾を知っている方々も、知らない方々も年尾忌を通してホトトギスの伝統俳句を学び、次の世代にそれらを継承して下さるのである。虚子、年尾の時代には想像もつかなかったであろうインターネットなどによる世界の変貌が、俳句の世界にも押し寄せて来ている。そして自然は人間によってどのような変貌をしていくのであろうか。自然を人間が征服するのであろうか。私はそうは思わない。今こそ私達はもう一度自然を見つめ直して行かなければならない大きな選択を迫られている時代なのではないだろうか。ホトトギスは間もなく創刊千四百号を迎える。この大きな節目にただ祝うだけでもいいが、ここで今我々の置かれた自然をもう一度しっかり見つめ直して行かなければならないのではないだろうか。人間の奢る心はやがて大きな代償を自然から受けなければならぬように思えてならない。

私は虚子と一緒に旅をした。昔のごとごととゆっくり走る列車の中で話をしてくれた。「人は謙讓な心を大切にしなければならぬが、卑屈になつてはいけない。思い上がつてはいけない。旅をしている時は腹六分目の食事をする事」これらがしきりに思い出される。

旬日記 汀子

平成二十四年 四月四日 ロイヤル併埋

嫁が君確かに走り抜けしかな  
年玉といふ重きもの軽きもの  
戻り来し一人の時間三ケ日  
三ケ日過ぎ早しとも遅しとも  
寒見舞せめて消息らしきもの

一月七日 萱屋ホトギス会

寒灯の消えて夜明の旅立に  
旅先で祝ふ七種粥となる  
一つづつ消えて寒灯なりしかな  
風花を舞はせ山懐に住む

一月八日 下萌句会

初空の富士へ昇りてゆく朝日  
冬薔薇に祝ぎの心の通ひけり  
乗初は仕事の旅でありしこと  
風花を零せし雲の逃げ易く  
東京の夜明を発ちて初御空

一月十日 大阪倶楽部

渋滞に十日戎と知られけり  
福始も十日戎のものらしき  
早々と福笹挿してある句会  
書初は使ひ古りたる墨と筆  
万両の実も余さずに啄める  
吉兆を提げて早々来られしと

一月十日 綿業倶楽部

悴みて言葉の不備となりしこと  
さつきまで悴みぬしが饒舌に  
初御空富士の夜明でありにけり  
初空をよぎる飛機ありわが旅路

一月十二日 清交社

新年の抱負を述べて一巡り  
お降といふほどもなき石畳  
戸締りをして凧の夜を早寝  
初夢に逢ひし故人の甦る  
寒中の風音夜の戸を叩く

一月十三日 工業倶楽部

雲抜けて抜けてやうやく初日の出  
松の内常と変らぬ旅心  
初旅の富士朝月を従へる

一月十四日 偲ぶ会

防寒着纏へば心ほどけゆく  
一月十五日 偲ぶ会  
オリオンの空寒月に明け渡す  
風邪押しして来られし人も旅仲間  
左義長の用意の伊豆の浜と見し

一月十六日 エルメスより依頼の一句

すれ違ふときアイリスの香を配る  
一月十七日 有恒俳句会  
新年を祝ふ仲間として集ふ  
寒月の細し暁闇地震のこと  
初旅を終へて富士見し帰路となる  
寒中といひ快晴といふ日和

寒中の十七年の祈りかな  
松過ぎてゐて改る会となる  
一月十七日 無名会

暁闇の寒月細し偲ぶ日に  
松過の災害の朝巡り来し  
餅花を外しとんどの用意して  
まとひ来し伊豆の明るさ春隣  
松過の旅とて常の如くにも  
はやばやと仕事始の旅となる  
冬芽抱く庭木に風のをさまりて  
一月十八日 夏潮句会

お汁粉をもて松納なりしかな  
焼諸の姿とどめず配らるる  
焼諸の匂ひの中へ加はりぬ  
焼諸の焦げ残りたる甘さかな  
悴んでをりし言葉を呑み込みぬ  
一月二十六日 さくらぎ会

双六や虚々実々の世に生きて  
東京に冷たき雨の降る日かな  
嫁が君とも風音と抜けにけり  
耐へて来し寒さも峠越えにけり  
一月二十七日 時雨句会

逆縁の悲しみ日脚伸びしとも  
稿債の減りつつ日脚伸びしこと  
冬薔薇の如く終へたる御生涯  
寒の内とて欠席の多き会  
雪深き地の電話とてつながりし  
悴かみてその後のこと今のこと

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年一月五日 蕉心会

冬ぬくし蕉心会に出ればなほ  
初夢は蕉心会の中の君  
船音に冷たく水尾の曳かれゆく  
花八手とは固まつて空を恋ふ  
もう散るを忘れたるかに冬紅葉  
モノク口の庭万両に解けゆく  
あなたには千両で充分過ぎる  
その中の水仙に君想ふ時

一月七日 芦屋ホトギス会

江戸を発つ七種粥を食うてより  
悴めるその一言が君らしく

一月八日 野分会芦屋例会

若水を汲みて次男は独身で  
雪女確かに君でありしこと  
みちのくは神話の里や雪女  
若水を汲んで初心の目覚めゆく  
雪女越後に闇を引き寄せて

一月九日 朝日カルチャー若草句会

手より目が先に歌留多を取つてをり  
傘寿には傘寿の艶や初化粧  
初鏡髻は剃らうか剃るまいか  
歌留多取一句授かるまで続く

年玉やもう将来を語る子等  
お年玉だけは貰つて帰らねば

一月十日 百夜句会

落葉踏む音に君との過去をふと  
寒紅に女の鬨志見ゆる句座  
恋心もろとも映し青写真

一月十二日 土筆会

光圀の現れさうな初景色  
寒声や金春流といふ艶に  
寒声といふ重低音ありにけり  
君忘る事勿れこの初景色  
初景色言ふたらやつば富士でせう

一月十四日 高濱年尾を偲ぶ初句会

枯尾花大室山の伽として  
春隣君が隣にあるリフト  
癒えし日に満天の星冴ゆるかな  
寒灯を出で星空といふ灯

一月十五日 年寿会

爪木崎灯台白く冬ざるる  
野水仙香のぶつかつてゐる斜面  
君の風邪薬になれればと思ふ  
冬さうび君の視線に輝けり  
寒灯下セシルセリーヌタイガース  
水仙の香に裏庭は黙を解く

一月十七日 草木瓜会

初電話より仲直りせし親子  
水仙や一直線といふ香り

野水仙水平線を見てをりぬ  
万本の水仙の香を攫ふ風  
初電話合格といふ報せかな

一月十九日 登高会

冬さうび一輪といふ重さかな  
富士見ゆる最南端の初日かな  
冬さうび咲かせ裏庭てふ気品

一月二十一日 野分会東京例会

赤く白く青く消えゆく雪女  
若水を汲んで太白砕きけり  
こんな夜は君が雪女に見えて  
せめて雪女くらゐは来て欲しき

一月二十四日 若水句会

初鶏や日本の未来告げるかに  
早梅や開国の海見ゆる丘  
一步又一步早梅香を寄せて  
初鶏や昭和の息吹残る村

一月二十四日 梅花祭出句

綻びてほころびて早梅となる  
子規虚子を学ぶ心に初景色  
春を待つことなく逝きし君のこと  
遺されし者の春待つ心はも

一月二十五日 目黒学園句会

待春の心切り裂く訃音かな  
天上の父に会ひませ春隣

一月二十九日 悼 岩井晴樓

# 雑詠

## 廣太郎 選

なにもかも形見となりし窓に虹  
 熱海 嶋田 一步  
 亡き妻といふ言葉出し梅雨明けし  
 同  
 君の死に涙の夏でありしかな  
 我孫子 副島いみ子  
 君の死を信じたくなし月見草  
 同  
 重心の鰲にありて汐まねき  
 静岡 須藤常央  
 潮引けば始まる宴汐まねき  
 同  
 陸に人沖にタンカー汐まねき  
 同  
 大寺の更けてしづまる盆の月  
 京都 安原 葉  
 退院の近き沙汰聞く涼しさよ  
 同  
 朝顔や晴れて親しき京の路地  
 同  
 遠花火恙ばかりの祖母のこと  
 神戸 山田佳乃  
 秋立つや夜風をまとふたばね髪  
 同  
 世話ばかり焼いて疲れて冷奴  
 同  
 露の世や二日繰上げ聖母祭  
 東京 大久保白村  
 鈴虫を墓前に放つガラシャの忌  
 同  
 チャペルより鶯のゆたかな司祭館  
 同

砂丘まで十分ほどの秋日傘  
 同 今井千鶴子  
 秋すだれ青く灯れる暮しかな  
 同  
 萩の花風にこまかき蝶となる  
 同  
 ばつた跳ぶ大地忘れぬ高さまで  
 香川 湯川 雅  
 鯛や尾鱸のやうな溪の風  
 同  
 天高くなる度に雲置いてゆく  
 同  
 秋暑し大河のつくる砂丘痩せ  
 樞原 稲岡 長  
 煌めきて遠州灘の秋の潮  
 同  
 初月を遠州灘の果に見る  
 同  
 筆を持つ暮しに遠く星祭る  
 神戸 藤井啓子  
 悪役のごとく入道雲現るる  
 同  
 秋暑し以下省略といふ訓話  
 同  
 離陸して夏休へと一直線  
 同 涌羅由美  
 サイダーの泡の向かうに船行き来  
 同  
 空の色重く背負ひて夏燕  
 同  
 ラムネ飲む子らの未来の神とあり  
 福山 竹下陶子  
 夕蟬の鳴き静まりし爆心地  
 同  
 時鳥神の黎明たちまちに  
 同  
 雲流れ流れ秋めく空残る  
 龍ヶ崎 今橋真理子  
 路地曲り秋めく風とすれ違ふ  
 同  
 盆礼といふ風呂敷の似合ふもの  
 同  
 秋天を断ち天平の深庇  
 奈良 古賀しぐれ  
 大楠は天の領域小鳥来る  
 同  
 歳月は巨石を遺し城の秋  
 同

# 雑詠句評(十二月号より)

比奈夫・公次・佳乃

くに彦・雅　・さい雪

しげ人・一步・純也

仁義・廣太郎

## 角見事なるゆゑ兜虫不運 八尾 山下美典

角が立派で強そうところが子供たちにもて囃され、採集されたり業者によって販売されたりして、結局は囿の身となつてしまふ兜虫。大切にされて兜虫は仕合わせとも見えるが、兜虫にとつては不運なことと作者は思われた。全てこの不運はその角の見事さによると結論されたのである。誰もがふと感じることを、はっきり断定されて面白い作となつた。(比奈夫)

筆者が子供の頃は、六甲山の奥にある機林で「兜虫」を捕つた記憶があるが、その林は今でもあるのだろうか。何れにせよ、角の立派な雄の兜虫は子供達が我先に欲しがらる昆虫の代表的なものである。確かにこれは兜虫にとつてみれば災難であろう。ユニークな視点で季題を的確に捉えている

## 吾に俳句遺してくれし墓洗ふ 奈良 古賀しぐれ

残してくれた俳句とは、色紙や短冊に書かれたものではなく、俳句の道、ひいては花鳥諷詠詩を学ぶ作者自身という意味でもあろう。作者の父上は、近江の俳人、故中井余花朗氏、母上もまた俳人であられた。盆を迎えるにあたり、実家の墓掃除をしながら、俳句を学ぶ幸せを今さらながらに感じつつ、この道へ導いてくれた御霊に感謝している作者である。情の濃い句であると思う。(八公次)

正に俳句一家として育つてこられた作者ならではの感慨の込められた一句であろう。虚子の高弟中井余花朗氏を父上にもたれる作者自身も俳句一筋に歩んでこられ、現在では一誌の主筆として大活躍をされている。そんな事も報告されておられるのではないだろうか。(廣太郎)

(以下略)

天地有情

満天の星に貫ひし花明り 東京 稲畑廣太郎  
 満天の星は朧を解きゆく 同  
 梅雨明くる檸檬のやうな月が出て 熊本 岩岡中正  
 涼しさに魚の会話のきこえさう 同  
 点滴の加減見つつの夜食かな 神戸 三村純也  
 残されし日をとにもて爽やかに 同  
 帰国する荷に加へたる古茶の筒 周南 小川龍雄  
 葉桜や帰国叶へど単身に 同  
 白雲の放てる風や秋めきし 東京 山田閨子  
 寝惜しむや異国の島の星月夜 同  
 走り穂にももの光のありにけり 神戸 後藤立夫  
 一景となる秋風の吹きてより 同  
 退院をされし師の夢明易き 京都 安原 葉  
 退院の赤き西瓜のおいしさよ 同  
 重力に耐へて楯円や露の玉 榎原 稲岡 長  
 秋燈下奇稲田姫画像映ゆ 同  
 浜名湖のちりめん波に秋燕 東京 今井千鶴子  
 秋水の流れやまざる橋の影 同

心子選

桐一葉影となりつつ落ちにけり 熱海 嶋田一步  
 桐一葉音なく落ちてちがひなし 同  
 句とともに歩む人生草の花 奈良 古賀しぐれ  
 俳諧の色となりけり藤袴 同  
 夏の朝天に召されし摩耶子かな 我孫子 副島いみ子  
 摩耶子逝く又逢ふ日まで月見草 同  
 星に濡れ潮騒にぬれ露けしや 東京 河野美奇  
 波音に起きてをりたや星月夜 同  
 今日処暑と思ひ心を立て直す 金沢 藤浦昭代  
 今日処暑に暦ばかりが先行す 同  
 娘の霊のほと灯りたる岐阜提灯 福山 竹下陶子  
 わが庭の虫鳴くホ句の小天地 同  
 帷子は涼しげなれど着しことなし 神戸 後藤比奈夫  
 蠅帳の待ちぬる人の一人ならず 同  
 消えてなほ仰がるかな夕月夜 同 長山あや  
 沼ひとつ真中に抱く大花野 同  
 突として思はぬ近き秋の蟬 東京 高濱朋子  
 夜の闇稲田明りを鎮めたる 同



# 天地有情句評

汀子

葉桜や帰国叶へど単身に 周南 小川龍雄

ようやく帰国出来た作者の転勤先を甘受して。

白雲の放てる風や秋めきし 東京 山田閔子

待たれた秋めく身辺の変化。

満天の星に貫ひし花明り 東京 稲畑廣太郎

満天の星空の下の桜に置く心。

一景となる秋風の吹きてより 神戸 後藤立夫

秋風がもたらした自然の情景。

梅雨明くる檸檬のやうな月が出て 熊本 岩岡中正

退院をされし師の夢明易き 京都 安原 葉

梅雨の名残の月と見る。

心配をおかけた作者に感謝あるのみ。

残されし日をとみにみて爽やかに 神戸 三村純也

重力に耐へて楢円や露の玉 榎原 稲岡 長

母上を見舞う作者の心情。

丸い露の玉が楢円形になる瞬間。